美術新報
第九卷
第七號

時言

東京美術展覽會論

東京美術及美術工藝展覽會は開かれたり。開會前には種々反對の聲あり、紛擾の觀ありたる割合には、場內の模樣は比較的に整頓せりと見ゆ。そは主として陳列の比較的に整理せられたると、出品鑑別の昨年に比して一歩を進め、稍精選の傾あるとに因れり。

然れども全體として此展覽會を見るに、決して成功せるものと云ふこと能はず、何となれば此展覽會を通觀して、第一吾人の頭に來る感じは、稍〻「まゝ事」じみたること是れなり。そは日本畫の部のみは比較的見るべきものなきにあらざるも、それすら陳套の作多く、作者の意氣に於て、此展覽會を餘り重視したりとは見えず、其他彫塑あり、洋畫あり、寫眞あり、圖案あり、各種の美術工藝品ありと雖も、僅かに各部の成立を見るに過ぎず、恰も幾段の重箱に諸種お料理の標本をちよつぴり〳〵と詰め込みたるに似たるを以てなり、雜多にして、こまぐ〳〵しく、觀來り觀去て後、畢に尋常平凡の感を免れず。若し此展覽會にして、有觸れたる出品を陳列し、有觸れたる審査をなし、有觸れたる授賞をなして能事了れりとなすものならんには則ち止む、果して然らんには特に東京府並に東京市の補助金を受け、奬勵がましき觸れ込みを以て、斯かる展覽會を開くの要は何處にあるや。近來展覽會の流行熱頗る盛んにして、各種の小團體、諸家の私塾に至るまで、無闇に展覽會を開き、臆面もなく駄作劣作を陳列して入場料を貪るの弊風あり、吾人は實に展覽會濫設の弊害を認む、寧ろ展覽會取締法にても發布せられて美術界の廓清せられんことを希望する位なり。斯かる時期に於て府市の補助を仰いでまでも、尋常有觸れたる展覽會を開くの必要ありとは、吾人の了解に苦むところなり。

抑〻博覽會や共進會を以て產業奬勵上最上の手段となしたる時代は既に過ぎ去れり。多くの博覽會や共進會は今や商人の廣告機關と化したり。之と同じく、展覽會さへ開けば、美術乃至美術工藝を奬勵し得べしと信ずるは舊き勸業的思想の餘響のみ。徒らに野心家の利用となり了らずんば幸なり。今の時に於て特殊の目的なく特殊の方法なくして展覽會を開くことが、根本に於て既に誤れり。東京美術及美術工藝展覽會にして果して奬勵の趣旨にて開かれたるものなりとせば、吾人は殘念ながら事實に於て失敗せりと直言せざるを得ず。

風景　セザンヌ筆

此展覽會にして今後年々開設せらるべきものならば、吾人は同會將來の爲に、聊か改良策を勸めんと欲す。當事者果して吾人の說に耳を傾くるの宏量あるや否やを知らずと雖ども、玆に聊か吾人所見の一端を述べんか。

第一、美術部を全廢すべし。そは文部省展覽會は假令一二兎角の世評はありしとも、今や殆全國の精英を鍾めて、美術家の最も精力を傾注するところとならんとしつゝあり。而して洋畫界に於ける白馬會、太平洋畫會の二大團體は、各自會の展覽會を有し居るを以て、現に東京展覽會に對しては一顧の勞をさへ與へざりしにあらずや。彫塑界に於ては彫工會は年々其自會の展覽會に於てすら、大に衰頽の色を現はし、又他を顧るの餘裕なきもの〻如し。此に於てか東京展覽會美術部は獨り日本畫を中心として其存立の基礎を据ゑんとしたるも、其成績は遙に文部省展覽會に及ばざるのみならず、他の私設團體に比較して、重複ながら、纔かに對立し得ると云ふに過ぎず、是亦作者が、始より同會に重きを置かざることを證明するものに外ならず、美術家既に同會を視ること重からず、到底好果を收むべき目算は立たざるなり。寧ろ如かんや、美術部を全廢して、其力を美術工藝部に傾倒せんには。

第二、美術工藝部の經營に於ても、漫然在來の慣例を踏襲するのみならば、特に此展覽會を開設するの必要あらず。何となれば日本美術協會を始め彫工會、漆工會、金工協會、鑄金會等夫〻〳〵年々互に類似の展覽會を開き居れり。此間に立ちて東京展覽會が、何等鮮明なる旗幟を揭げず、何等特色ある目的方法なくして、其上更らに類似の展覽會を開くも効果を擧ぐること能はざるは、何人にも最も睹易き事理にはあらざるか、見よ、昨年第一回は雜駁凡庸の大失敗を招き、今年第二回は稍選拔の觀あるも、列品の作柄、品質に於て特に目立ちたるものなく、甚だあつけなきにあらずや。是れ固より當然の數なるのみ。

同會の爲に謀るに、同會は宜しく其存立の目的を選ばざるべからず、其目的にして正當ならば假令初より俄に成功を見ざるも、必ずや早晩効果を擧ぐるの時機あるべく、天下の同情は自ら同會の上に集まるべし。吾人を以て之を見るに、今日の美術工藝界に於て企圖すべく、將た奬勵すべき方面は頗る多し、玆に其の一例を擧ぐれば、美術工藝品をして新時代の趣味に適應せしむべく、現代の實生活に適切なる新發展を企圖すること是れなり。由來美術工藝品と云へば金銀彫嵌花瓶の類か銀製彫金莨入の類か、蒔繪書棚、硯箱の類か、陶磁七寶大花瓶の類か、刺繡の屛風額面の類か、香盒か、風俗人形牙彫か寶石入の簪或は腕輪の類か凡て輸出向又は昔の大名、今の成金の贅澤品にして、絢爛俗眼を眩燿し、徒らに高價なる材料を用ゐ、手の込みたる細工（多くは徒らなる煩勞）を施し、價格の不廉を誇るに過ぎず、其手法型式は殆全く前代の遺蹤を踏襲し、現代社會多數人の實生活に交渉少なく、隨て新時代の趣味を顧慮せず陳套新意なく、凡俗生氣なきは心細き次第にして畢竟美術の意義を誤解し、高價、古風、細工の込入りたる事等を以て美術工藝に缺くべからざる要件の如く曲解せるに因るなり。此の如き玩弄的お飾り物的舊思想を打破し、圖案意匠に於て、應用の範圍に於て、總て獨創の新意を出して新時代人の趣味と感興を促すに足り、模倣と踏襲とを離れたる作品を奬勵するを以て眼目とし、新趣味新技巧の競技場を設くること、目下の要務の一なり。同會の如きは是非斯る點に着手せん事を勸む。